

青森プロボノチャレンジシンポジウム トークセッション概要

- 日 時 平成 31 年 1 月 25 日 (金) 14:30～15:30
- 場 所 ラ・プラス青い森 (青森市)
- テーマ 人口減少の激流にある青森でプロボノを定着させて、地域共生社会を実現するためには何が必要か

【コーディネーター】

認定 NPO 法人サービスグラント 代表理事 嵯峨生馬

【パネリスト】

株式会社リクルートマネジメントソリューションズ組織行動研究所 研究員 藤澤理恵
特定非営利活動法人地域情報化モデル研究会 代表理事 米田 剛
特定非営利活動法人子育て応援隊ココネットあおもり 副代表 久保田 正美



【コーディネーター】

米田さんから自己紹介を兼ねて活動の経緯や内容について御紹介をお願いします。

【米田氏】

(特定非営利活動法人地域情報化モデル研究会は、)ICT の利活用による地域活性化モデルを創出し、地域の課題解決と地域の ICT 活用促進に貢献するプロボノ活動団体で、官民の有志を募って 2007 年 4 月から活動しています。

企業人が持っている専門性や行政が持っている社会的知見やネットワークを結合して、垣根を越えて地域活性化に向けた ICT 利活用の知見を無償で提供しています。

従業員の社会貢献をしたいという思いでこの取組を始めましたが、会社内の取組と分けて活動するため、NPO 法人を立ち上げ、あおもりの地域 SNS を活用した地域共創活動や観光クラウドの提供、オープンデータの活用等の活動を行ってきました。



米田 剛氏

【コーディネーター】

プロボノの活動にどれくらいの時間をさかれていますか。その割合はどれくらいでしょうか。

【米田氏】

だいたい 3 割がプロボノ活動でしょうか。私の場合、会社のミッションとプロボノが融合した結果、会社にながらプロボノ活動をすることを認めてもらえました。

【コーディネーター】

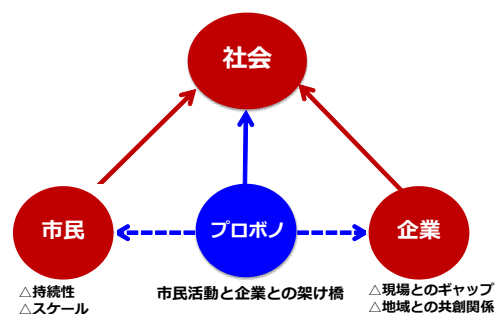
米田さんがプロボノ活動を行っている意義はどのようなものでしょうか。

【米田氏】

意義は、大きく 3 つあります。

まず、「人と社会と企業をつなぐ自分価値の創造活動」といえます。プロボノとは、市民活動と企業活動のお互いのいいところを組み合わせることで社会課題を解決するため、市民活動と企業の社会事業の架け橋になれる存在です。そこに私がいることで自身のアイデンティティーや自己意識を作ることができます。(図 1)

人と社会と企業をつなぐ
プロボノは市民活動と企業の社会事業の架け橋になれる存在



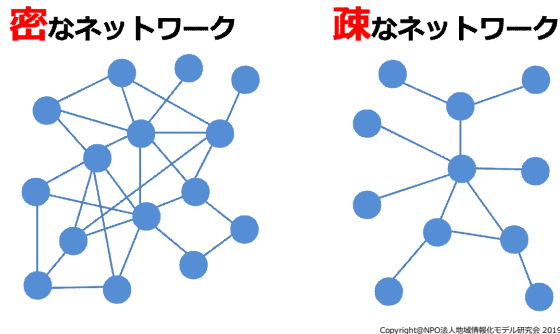
(図 1)

次に「自分の可能性を広げるネットワーキング活動」です。会社組織のような「密なネットワーク」とは異なり、自ら地域社会に出て全く違う価値観で遠い人、かつネットワークが隙間だらけの環境である「疎（そ）なネットワーク」に身をおくことで、新しい気づきがあり、自由な動きができます。そこから自身のクリエイティビティや仕事のイノベーションにつながっています。(図2)

最後に、「モチベーションを作る活動」がプロボノといえます。プロボノは、賞罰や損得など外発動機で動くものではなく、自分の思い、志、自分の技を社会や誰かのために役立てたいという善意による内発動機で動くもので、特に内発動機は知恵を生み出すエンジンになります。

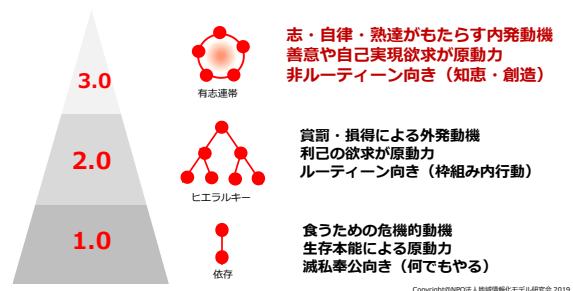
(私が所属している) 情報産業は、創造産業とも呼ばれますが、これからは労働生産より知恵を生産しないと生き残れません。知恵をどんどん出したくなる活動としてプロボノは良い活動といえます。(図3)

イノベーションを生むネットワーク



(図2)

モチベーション3.0 by ダニエル・ピンク 労働生産時代から知恵創造時代へ 知恵を生み出す新たな働く動機



(図3)

【コーディネーター】

損得なしとはいえ、知恵を出して新しい生産をすることは会社の生き残りにつながりますので、結果、損得といえる面もあるように思われますが、どうでしょうか。

【米田氏】

結果として損得はないと続けていけませんし、損得は必要ですが、ファーストではないということです。

【コーディネーター】

次に会社としてプロボノが公認されている背景について御紹介いただけますか。

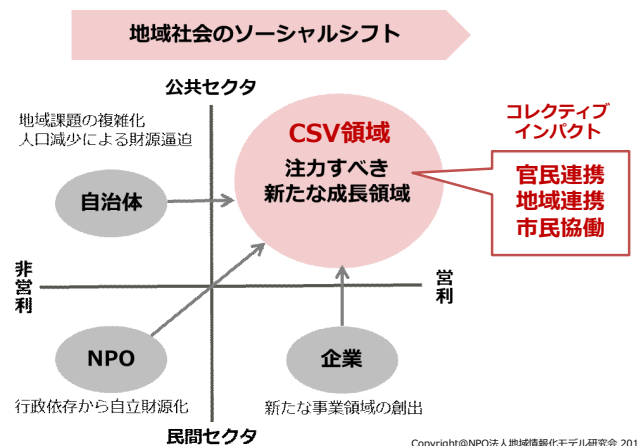
【米田氏】

ソーシャルビジネスが、会社の一つの地場の貢献といえます。ただ会社としては、どうやって社会にビジネス領域を作れば良いかが分かりません。そのため、クリエイティブな人材を育成していかなくてはなりません。

企業にとってプロボノとは、ソーシャルビジネス領域へのお金のかからない投資といえます。

様々な地域課題があり、公共セクター(行政)だけでは社会の全ての課題を解決できませんし、民間の力が必要です。一方、NPOセクターも行政委託だけでなく自主事業を行わなくてはならない状況です。したがって、企業、NPO、自治体も必然的にソーシャルシフトしていく社会状況にあり、会社としては、その道筋を探してしてくれるプロボノに期待をしています。(図4)

個別セクターでの事業の限界 → 各セクターの融合へ



(図4)

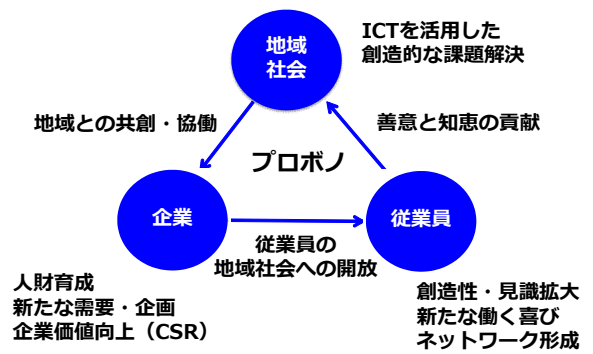
企業、社会、従業員「三方よしのプロボノ活動」を行っていることが、これまで活動を続けられたポイントといえます。

企業は、従業員を地域社会へ開放して、勤務時間中のプロボノ活動を認めるなど従業員のプロボノ活動を支援します。

従業員にとっては、クリエイティブな環境に自分を置くことで、いろんなネットワークが形成され、善意と知恵で地域社会の困っている人に知見を提供し、一緒に課題を解決していきます。そして新たな働く喜びも得ることができます。

そうした活動を通じて地域課題や自分達の役割が発見でき、ネットワークが生まれ、そこから企業の新しい事業の創出や、CSRとしての企業価値につながっていくと思います。(図5)

三方よしのプロボノ活動モデル



(図5)

【コーディネーター】

お金がかからないとはいえ、3割の時間は、給料をもらって活動をされており、大企業だから出来る事では？と思う方もいらっしゃるかもしれません。しかしながら、経営者からすると給料は固定費で、それをうまく効果的に活用していくことで可能性が開けていくのではと感じました。

また、これから変わっていく社会の中で、地域課題や社会課題の解決、いわゆる「ソーシャル」な分野で企業がどう振る舞えるのか、誰かが先兵隊となって、試行錯誤しなければいけない時代にきています。米田さんは、会社から言われずに社会に飛び出しましたが、会社が、戦略的にそうした人を作っている、ソーシャルな分野に触れることを「投資」ととらえて取り組んでいく時代が近づいているといえます。私からは、米田さんがそのロールモデルに見えました。

次に久保田さんからココネットあおもりの取組についてお話を伺いたいとます。



久保田 正美氏

【久保田氏】

ココネットあおもりは、ママとパパのマインドアップ、支援者のスキルアップ、地域の子育てパワーアップの3つの合い言葉のもと、あずましい青森の子育てを目指して2006年から青森市で活動をしている子育て支援団体です。

主な活動内容は、学ぶ、集う、寄り添う、集う、という循環型の活動スタイルで年末年始を除いて毎日どこかで活動をしています。

主な活動内容は、学ぶ、集う、寄り添う、という循環型の活動スタイルで年末年始を除いて毎日どこかで活動をしています。

具体的には、子育て支援者の育成としてホームスタートホームビジター（産前産後ビジター）養成講座の開催やそうした講座を通じて育成した人材を子育て応援ルーム「ココかれっじ」、青森市つどいの広場「さんぽぼ」のスタッフなどとして活用しています。(図6)

そのほかに、ママのエンパワーメントとして、活動を通して出会ったママ達のこういうことをやりたいという声にこたえて、これまでも自主性、主体性をそがないようにエンパワーメントを引き出す後方支援を行ってきました。ママ達一人ひとりが持っている力を引き出し、応援することで輝きを取り戻すことができないかと模索している中でママボノの取組に出会いました。



(図6)

【コーディネーター】

「ココネットあおもり」さんは、英国で始まった「ホームスタート」というプログラム、カナダ生まれの親学習プログラムであるNP（ノーバディズパーフェクト）プログラムなどに取り組み、世界からプログラムを持ち込んで活動されています。普段からママを応援できるプログラムとは何かということでアンテナを張られていて、プロボノもそういう目線で見ただけなのかなと思いました。

今回ママボノに関心を持たれた経緯やどんなところに関心を持たれたのでしょうか。

【久保田氏】

私自身の経験からも一旦育休や退職して専業主婦から復職するのはとてもハードルが高いと感じていました。復職前にママの不安を軽減して、自信回復につながる何かワンクッションが必要だと感じてアンテナを立てていました。そうした中でママボノの取組を知り、今回の青森プロボノチャレンジ団体募集の際に、プロボノによる支援を受ける選択肢もあったのですが、ママボノをやりたい気持ちが強く、応募に当たりママボノに関心がある事を伝え、採用していただきました。

【コーディネーター】

民間のシンクタンクでの調査では、育休産休をしている方の8割が、復職に当たり不安であると答えています。このことは、日本の課題であると考えています。

今回、希望されてママボノを実際にやってみていかがでしたでしょうか。振り返って感想を聞かせてもらえますでしょうか。

【久保田氏】

大阪や東京で取り組まれていたママボノ（プログラム）が地方で出来るのかなという不安はありましたが、まずやってみようとチラシを作成してママ達を募集し、4人応募してもらえました。

ママボノチームの活動を行う時は、必ず傍らに子どもがおりますので、メールとラインが連絡の基本でしたが、対面でのミーティングを5回行い、うち2回は、ツル多はげます会とのミーティングを行いました。ママボノ活動期間に、吸盤綱引き全国大会が開催され、大会見学をするなど楽しく活動をしていたのですが、ママ達のやる気がすごくて、どんどん主体的に作業を進められて、すばらしいホームページを作成したという感じでした。

【コーディネーター】

ママさん達は、はじめからやる気があったのでしょうか。

【久保田氏】

参加者説明会の場では、プロボノが出来るかな、大丈夫かなという雰囲気になりましたので、私もやるからやってみようと声をかけさせていただいて、やってみることになりました。

【コーディネーター】

鶴田町まで距離が遠いといったことで、不安もあったのではないのでしょうか。

【久保田氏】

確かに鶴田町まで車で約50分ですし、子ども連れなので鶴田町まで行って話し合いが出来るのかという不安もありました。また、成果物のウェブ（WEB）が完成するのかという不安もありました。

【コーディネーター】

そうした中で子育てをされていた方がママボノに参加して、その後の変化はありましたか。

【久保田氏】

ママボノに参加したママの方の中に看護師の資格を持っている方がおり、参加前その方は看護師の仕事しか私には出来ないと考えていたそうです。今回のママボノの取組を通じて看護師の仕事以外に私にも出来ることがあるかもしれないと気づかれ、さらに「ココネットあおもり」の活動に興味を持っているということで、当団体のボランティアスタッフになっていただき、現在、委託事業の仕事をしてもらっています。

【コーディネーター】

藤澤さんに伺います。「私はこれしか出来ない」から、「私はこういう事も出来る」への変化は、意味180度変わったともいえる変化ですが、どういう事が起きてこうなったのでしょうか。何が変わったのでしょうか。

【藤澤氏】

米田さんのお話にありました、狭い範囲で濃いつながりが形成されている「密なネットワーク」よりも、所属集団や専門性が遠い人が薄くつながっている「疎（そ）なネットワーク」のほうがイノベーションが生まれやすいということとも関係があります。密なネットワークでは、その集団内や文化に特有の「当たり前」が再生産されて、それが唯一の常識と感じられがちです。

一方、疎（そ）なネットワークでは、いろんな常識が世の中にあって、そうであれば他の常識を取り入れてもいいかなという気持ちが起きたり、また、同じ人間関係の中では、自分はこういうものだと思い込んでしまっていたけれど、実は違う側面があるということに気が付いたりします。その結果、そうした凄い事が起こることがあると思います。



嵯峨 生馬氏

【コーディネーター】

ありがとうございます。これまで米田さん、久保田さんから活動紹介いただき、いろいろな角度からプロボノが動き始めていることが伝わったかと思います。

本日のテーマは、青森県で共生社会を目指して、県民総参加でどう地域づくりに取り組んでいくかということです。

御承知のとおり青森県でも少子高齢化が進み、そして様々な地域課題に対応する担い手も不足しています。そこで、スキルや経験を持った人がプロボノなど様々な形で地域参加をしていく事が求められています。私にも何か出来るかもと1歩前に出ていってくれる事が各地で起きていくには、まだまだやれる事がたくさんあるかも知れません。気持ちがあっても1歩を踏み出せていない事があるとしたら、少し背中を押してあげて気持ちを変えてあげて、前に進んでいく仕掛けが必要かと思います。

プロボノをはじめ、一人ひとりが持っている専門性、スキル、経験など潜在的な可能性を生かして、県民総参加をしていくことについては、総論としては納得いただくことだと思います。

とはいえ、実はこういう問題があって、あるいはこういう部分が整っていないので、こういう仕組みが定着しないといった事があるかと思います。

米田さん、久保田さんの視点から、そうしたプロボノや地域参加が進まない課題がありましたら、提示いただければと思います。

【米田氏】

プロボノ、職能を生かすという事になると、会社と本人とがハイブリッドの関係に立たないといけないことなので、本人のやりたい意志と歯車をかみ合わせないといけない。

個人的には、プロボノといわなくても潜在的にはそうした取組をしていらっしゃる方がいて、例えば、大工さんが、休日に学校を直すなどこういう取組もプロボノと言えるかもしれません。

それを会社が応援する部分が出来てこない腰の入ったものにならないのではないかと思います。

会社に対してプロボノの価値を正しく伝えて理解してもらい、可視化していくことが、底上げをしていくうえでの課題であると思います。

【コーディネーター】

課題としては、会社が応援する仕組みをどうつくるか、ですね。

久保田さんはどうでしょうか。

【久保田氏】

ママボノは、ママが子育てや家事の合間に作業をするので、日々の色々なことでやる気が起きない時もあるかと思います。また、ママ同士、相手の状況がわかるのでお互い気遣いすぎて、逆に負担感を感じることも出てくるかもしれませんので、グループを調整するサポート役は必要だと思います。

【コーディネーター】

プロボノの主たる役者は、支援先団体とプロボノとして関わる皆さんですが、その他にコーディネーター、調整役が大事である。プロボノをコーディネートする専門性を持った方が必要ではないかということでした。

藤澤さんからその他にありますでしょうか。

【藤澤氏】

これまで、都市・東京でのプロボノを調査してきて、青森では何か違うところがあるのかと関心をもって調査に臨みましたが、参加動機や活動内容に違いはほとんど感じられませんでした。違うところは、2点ありました。一つは逆風の事、もう一つは追い風の事です。

逆風と感じたのは、居住地などの距離が遠いことです。その点は、交通アクセスもよい東京とは違うと思いました。ただし、テレビ会議やメールなどのツールを活用すれば乗り越えられると思います。

もう一つは、大きい追い風で、私から見ると、共生社会にすごく近いと感じました。企業人として社会を良くしていくことに関わる距離がすごく近い。東京では、個人が少し参加しても何も変わらないのではと感じてしまうほど都市が大きいですが、青森であれば、皆さんが手と手を取れば社会は変えられるし、参加したインパクトも大きいです。社会を変えるための今年の青森プロボノチャレンジであったとひしひしと感じていますし、米田さん、久保田さんのような仕組みづくりに積極的に取り組まれる人材がいらっしゃるということも、他にはない貴重な財産と思います。ここ（青森）で続けていかないとどこでやるのかという気持ちです。

【米田氏】

青森はずっとハンデだと思っていました。しかし、人口が少ない青森で社会貢献活動が出来るということは、相対的に自分の社会における価値が上がるので、私のような凡人でも役立っていると感じられるのがメリットかなと思いました。

【コーディネーター】

青森プロボノチャレンジも新聞などで大々的にメディアに取り上げてもらいました。こうした取組が始まると県内には早い速度で広がっていくと思います。

また、距離のお話がありましたが、地方のNPOではオンラインミーティングが進んでいて、距離が離れていることを割り切ってICTを活用することで、先進的な取組になっていく事もあるかと思っています。

課題を整理してみたいと思います。

(課題整理)

- ①会社の応援の仕組みづくり
- ②コーディネーターの不足
- ③個人が社会参加することのインパクトの自覚化・見える化

3つの課題が出ましたが、まだまだ、プロボノを定着させるためには課題があるという方もいらっしゃるかと思います。

ここで、会場の皆さんで話し合ってもらえますでしょうか。

(会場からの意見等)

- ①プロボノ自体が社会に理解されておらず、その点を周知徹底されてから、会社の支援を求めていく必要があるのではないか。
- ②プロボノをしたい人と受け入れたい人の出会う場所はどこか。
- ③(他県からの参加者)今日のシンポジウムで感じた事は、プロボノをする人、受ける人、それ以外の人で久保田さんのような方を(我が県でも)開拓していきたいと思います。

まとめ

【米田氏】

プロボノは、アクセルを踏み続けるのではなく、ゆるやかに続けていくものだと思います。そうした中で、様々な化学反応が起きて瓢箪から駒のようにチャンスが生まれてくるもの。

その時に、ゆるやかにやっているだけでは逃げたくなることもあり、そんな時に会社の後押しも必要です。ただ、個人の意思でやっていることであり、ことさらに業務報告をするものでもなく、どんなに良い事をやっても会社には見えづらい。そうすると会社との距離感が縮まらない。会社レベルの活動にならない。会社との連動性が大事ですが、個人と会社をどうつなげるか。

そのためには、第三者が個人の活動を可視化・評価し、会社にフィードバックする仕組みがあると1歩進むのではないかと思い、プロボノ認定制度という事を考えていました。

会社は、勤務時間のプロボノ活動を認め、プロボノによる貢献を受けた人が第三者に感謝のレポートをして、プロボノをやった人の貢献成果等を精査し、個人やそれを支援した会社を認定する仕組み。

認定を受けることで、個人では名刺に書けたり、企業では IR*に書けるといった事で個人・企業の社会貢献活動の価値が高まり、可視化も可能になると考えています。

プロボノ活動の見える化・評価する仕組みを誰かが考えてもらえると、良いスパイラルが生まれると考えています。(図7)

※IR【Investor Relations】企業による、投資家に対する広報活動。

【コーディネーター】

人から認めてもらい社会に貢献したという事が目に見える事で、その活動が支えられ、促進されます。権威的なものでなく、こうした仕組みができるの良いと思います。

次に久保田さんからコメントをお願いします。

【久保田氏】

ゆるやかに継続ということでしたが、ママボノもゆるやかに継続していくということが大事だと思いますので、今後もそのような形で取り組んでいきたいと思っています。

ココネットあおもりは、循環型の仕組みを意識していますので、今回活動したママボノチームが、先輩ママボノとして新しいママボノチームのアドバイザーとして次回参加してもらえると嬉しいです。

また、ママボノの取組が社会に認知されて、復職する際に履歴書にママボノ活動経験ありと記載することで、それがキャリアとして認めてもらえる社会になってくれたら良いと思います。

【コーディネーター】

ママボノを経験された方がいろいろなところで活躍する姿が、次の人を惹き付けることになると思います。ココネットあおもりとしても、ゆるやかに続けていくという事ですので、裾野が広がっていくことを期待しています。

藤澤さんからは、本日参加されている皆様へ県民総参加でプロボノを進めていくためのメッセージをお願いします。

【藤澤氏】

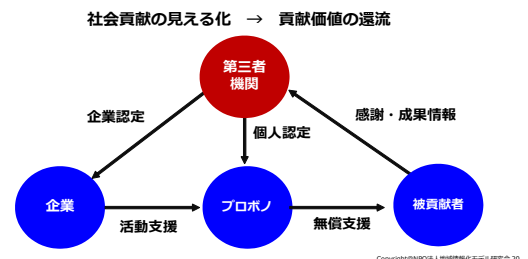
青森プロボノチャレンジは本当にすばらしい活動だったので自信を持って伝えて、次につなげていただければと思います。

会場の皆さんが考えている間に私たち（パネリストでも）でも考えていたのですが、上からの営業として企業のトップの方に社会貢献の機会に参加していただける「ボスボノ」も良いのかなと話していました。企業のトップと NPO の代表方がメンター的に学び合う機会があれば、社員の方も参加しやすくなるのかと考えていました。

プロボノ認定制度（案）

プロボノ活動に対し、その大小を問わず活動価値を第三者が評価し、個人や企業を優良プロボノとして認定する制度

（一定の活動実績により優良プロボノマーク等を認定発行するなど）



(図7)

可視化のための調査もしていますし、今後も紹介していく機会を増やしていきたいと考えています。そして、それを企業の課題解決にもつなげていきたいと考えています。人口減少の中で企業も生き残りのために必死に考えて仕事をしています。モチベーションとイノベーションの創出が、人口減少社会における企業の課題です。やりがいを求める世代の方々を採用し、辞めないでいただくことが課題ですし、人が減っていく中でも地域の壁を越えて価値を呼び込んでくる、アピールしていくことはイノベーションなしには出来ません。こういう状況だからこそ、イノベーションとモチベーションのための新しい方策についてプロボノを通じてみんなで探していくことは、青森だからこそ出来ることだと考えています。本当に応援しています。

【コーディネーター】

今日は、「青森でプロボノを定着させて、地域共生社会を実現するためには何が必要か」というテーマでお話を伺って参りました。

藤澤さんのお話もそうですし、米田さん、久保田さんのお話の中にも、キーワードや金言がたくさん出てきていました。この場で全てをまとめて振り返るという事が難しい状況です。

今日、お聞きになった事をこれからの生活や仕事の中で振り返ったり、反芻していただきながら、キーワードを職場の皆様と共有していただいたり、SNS やブログに掲載して振り返って、また広めてみんなで議論していただければと思います。

今年度、第1歩となる青森プロボノチャレンジですが、今後も取組を継続されていくと伺っております。ぜひ今後の取組につなげていっていただければと思います。

また、プロボノチャレンジだけがプロボノではなく、米田さんの取組やココネットあおもりさんの取組もあります。青森でどういうモデルや形が出来るのか未来志向で考えていただければと思います。

短い時間ですが凝縮されたディスカッションであったと思います。ありがとうございました。